

授業概要

いわゆるアベノミクスのもとで、円安が進み、株価も上昇してきました。景気も上向き、物価も上昇してきています。長かったデフレもようやく終わることが期待されています。

本演習では、アベノミクスとはどういうものを明らかにします。

そのため、戦後の日本経済と金融、資産バブル、平成大不況、政府の経済政策、日本銀行の金融政策について、くわしく指導します。

授業計画

第1回	現状の日本経済は
第2回	絶望的に貧しかった戦前
第3回	戦争放棄と民主化
第4回	歴史上まれにみる高度経済成長
第5回	高度経済成長がついに終焉
第6回	アメリカとヨーロッパへの輸出
第7回	日本列島改造論
第8回	バブル経済と崩壊
第9回	アメリカ型新自由主義の導入
第10回	デフレとは貨幣現象なのか
第11回	日本銀行のデフレ対策
第12回	日本銀行の異次元緩和
第13回	デフレの克服は可能か
第14回	1千兆円の政府債務は返済できるか
第15回	日本経済のゆくえは
第16回	試験

到達目標

デフレが長期化した要因を理解したうえで、日本銀行の異次元緩和によって、本当にデフレを克服できるのかを明らかにします。

アベノミクスというものの概要を理解してもらうことを到達目標としています。

履修上の注意

演習をおこなっている間に、いよいよ、アベノミクスが成功するか否かが、見えてくるはずですが、ですから、新聞をよく読むことや日々のニュースに関心を持ってください。

予習復習

演習では、資料や新聞記事などを読みます。

事前にわたす資料などを演習前によく読み、演習終了後には、復習してください。

評価方法

レポート（70%）、演習での発言（30%）などで評価します。

テキスト

テキストは使わず、適宜、資料を配ります。

授業概要

この演習の課題は、大学で学ぶ目標をしっかりと持つこと、読むこと、調べること、書くこと、報告することなど今後の就学に必要なスキルを修得することにある。この演習では、自分で自分の課題を見つけ、考え、解決に向けて進む意欲を持つこと、また社会への関心、国際的な視野を獲得することができるように指導する。

授業計画

第1回	本演習の進め方や評価方法
第2回	新聞や雑誌の読み方と使い方
第3回	専門的な文章の読解力の向上（1）
第4回	専門的な文章の読解力の向上（2）
第5回	専門的な文章の読解力の向上（3）
第6回	専門的な文章の読解力の向上（4）
第7回	専門的な文章の読解力の向上（5）
第8回	文章の要約力とレジュメの作成（1）
第9回	文章の要約力とレジュメの作成（2）
第10回	文章の要約力とレジュメの作成（3）
第11回	各自のテーマによる調査発表と討論（1）
第12回	各自のテーマによる調査発表と討論（2）
第13回	各自のテーマによる調査発表と討論（3）
第14回	各自のテーマによる調査発表と討論（4）
第15回	各自のテーマによる調査発表と討論（5）
第16回	まとめ

到達目標

この演習は、豊かな人間性を備えた企業人になるために、幅広い教養を身につけることを念頭に置き、大学における学習に必要な基礎的学力を向上させることを意図としている。

履修上の注意

- ・ 毎回必ず出席してほしい。
- ・ 演習は参加型授業なので、積極的に、発言や議論をしてほしい。

予習復習

- ・ 配布資料を事前に目を通しておくこと
- ・ 発表や講義の要点をまとめること

評価方法

レジュメの作成と発表、課題提出、ゼミでの積極性などを総合的に評価する。

テキスト

- ・ 開講時に指示する。
- ・ 必要に応じて、資料を配布する。

授業概要

毎日を健康に過ごし長生きするためには、「セルフメディケーション (Self Medication)」という考え方が大変重要になってきている中で、本講義ではセルフメディケーションに関する知識を習得し、今後益々活性化する医薬品業界について学修する。WHO は「セルフメディケーションとは、自分自身の健康に責任を持ち、軽度な身体の不調は自分で手当てすること」と定義しており、できるだけ毎日の生活の中で心身や薬の知識を持ち、セルフケア能力を高めることが重要であるとされていることについて学修する。さらに 2017 年 1 月より開始されたセルフメディケーション税制についても理解を深め、薬を取り巻くビジネスの現状について学修する。医薬品業界研究に関する演習を通して、セルフメディケーションを促進する新たなビジネスモデルについても理解を深める。

授業計画

第 1 回	セルフメディケーション (Self Medication) とは？
第 2 回	セルフメディケーション税制について
第 3 回	OTC 医薬品 (一般用医薬品) とは？
第 4 回	医療用医薬品との違い
第 5 回	サプリメントとの違い
第 6 回	薬事法の改正
第 7 回	薬局、ドラッグストアの役割
第 8 回	インターネットによる販売と消費者の知識
第 9 回	医薬品メーカーの現状
第 10 回	MR (医薬情報担当者) の仕事
第 11 回	グローバル医薬品業界研究① ファイザー
第 12 回	グローバル医薬品業界研究② メルク
第 13 回	グローバル医薬品業界研究③ ノバルティス・ファーマ
第 14 回	国内医薬品業界研究：武田薬品他
第 15 回	セルフケアの推進と今後の展望
第 16 回	試験

到達目標

- ・セルフメディケーションについて説明できる。
- ・セルフメディケーション税制について説明できる。
- ・医薬品業界について理解を深める。
- ・コミュニケーション能力、プレゼンテーション能力が身につく。
- ・文章作成、資料作成能力が身につく。

履修上の注意

医薬品業界に関心を持って欲しい。

予習復習

予習 45 分 (発表準備資料作成)、復習 45 分 (専門用語の理解)。

評価方法

発表点 (25 点)、レポート点 (25 点)、試験 (50 点)

テキスト

荒川博之 『医薬品業界の動向とカラクリがよくわかる本』第 4 版 秀和システム、1400 円

授業概要

テーマ：スポーツマーケティングへの導入

スポーツマーケティングの初歩的な考え方や基礎概念を、ひとつひとつ丁寧に学びます。ひとつひとつの概念や発想、思想、対立する意見などをきちんと自分たちで点検し、自分の頭で考えることの楽しさを身につけたいと思っています。

授業計画

第1回	演習の概要
第2回	スポーツとは何か(1)：スポーツの多様性とスポーツマーケティングの範囲
第3回	スポーツとは何か(2)：スポーツ産業とスポーツ市場 — 「観るスポーツ」・「するスポーツ」と市場の特性
第4回	マーケティングとは何か(1)：マーケティングの多様な定義と顧客のニーズ・欲求の区別
第5回	マーケティングとは何か(2)：マーケティングにおける理念、戦略、管理
第6回	マーケティングとは何か(3)：スポーツとマーケティングにおける営利と非営利
第7回	観るスポーツとマーケティング(1)：「観るスポーツ」のマーケティングの構造と市場
第8回	観るスポーツとマーケティング(2)：メガスポーツイベント、スポーツイベントのマーケティングと消費者
第9回	観るスポーツとマーケティング(3)：スポーツチームのマーケティングと企業スポーツ
第10回	観るスポーツとマーケティング(4)：スポーツ消費者行動としてのファンとブランド戦略
第11回	するスポーツとマーケティング(1)：「観るスポーツ」のマーケティングの構造と市場
第12回	するスポーツとマーケティング(2)：スポーツ用品企業とフィットネスクラブのマーケティング
第13回	するスポーツとマーケティング(3)：スポーツ消費者行動としての経験価値とスポーツスクール
第14回	するスポーツとマーケティング(4)：スポーツへの参加を促すマーケティングとメディカル・フィットネスの可能性
第15回	スポーツマーケティングと社会：スポーツマーケティングの地域性とグローバル性
第16回	試験

到達目標

スポーツ、マーケティング、スポーツマーケティングの最も基本的な概念を理解できることを到達目標としています。同時に、それぞれの概念について、自分自身で調べ、考える力を身につけることを目指したいと思えます。

履修上の注意

演習では、グーグルなどを使ってインターネットで調べてくるという課題を出します。スポーツイベントや組織はグローバル化していますので、日本語のウェブサイトだけでなく、英文のウェブサイトを調べることを嫌がらない態度が望ましいといえます。なお、演習には必ず出席して下さい。30分以内の遅刻は認めますが、遅刻3回で欠席1回分にカウントされることに注意してください。

予習復習

事前にわたす資料などを演習前によく読み、演習終了後には復習してください。また、予習・復習のためにネットなどで調べることは必須です。

評価方法

演習への出席を前提とし、最終試験、および演習でだされた課題の遂行の状態によって評価します。演習では、積極的に意見などを述べる学生、および英文資料をいやがらない学生は、高く評価されます。

テキスト

テキストは使わず、適宜、資料を配り、またインターネットで調査したウェブサイトを利用します。

授業概要

1年次の教養演習は、2, 3, 4年次と徐々に専門的な内容に進んでゆく最初の段階の演習である。「演習」とは、何かのテーマについて教員から講義を受けて理解して終わるものではなく、学生自らが何らかの目的あるいはテーマに対して、何かの行動を起こして初めて成り立つものであると考えている。

そこで、教養演習Ⅱでは受講生の興味があるモノやコトを出発点とした企業や業界をテーマとする。

授業計画

第1回	演習での姿勢とレジュメについて
第2回	テーマの選択と資料収集について
第3回	時事問題（夏季休業中の出来事）を考える①
第4回	1回目のテーマに基づくプレゼンテーション
第5回	//
第6回	1回目のプレゼンに関係したその続きのテーマの検討
第7回	時事問題（その時点での出来事）を考える②
第8回	2回目のテーマに基づくプレゼンテーション
第9回	//
第10回	時事問題（その時点での出来事）を考える③
第11回	3回目のテーマに基づくプレゼンテーション
第12回	//
第13回	レポートの章立てと結論について
第14回	提出するレポートの途中経過の報告
第15回	修正したレポートの内容確認
第16回	レポート（場合によっては定期試験）

※ 人数等により進度と内容は随時調整します。

到達目標

プレゼン用のレジュメを作成でき、それに基づいた質疑応答ができるようになる。

履修上の注意

人数が少ない場合には、会計ないし経営に関する文献の輪読やレポートを交える。

テーマは上記のとおりだが、到達目標に示したように、講義ではなく演習なので、聞くだけの内容を考えていない。課題やグループワークも含めて受講者が積極的に発言等をしてもらう。

予習・復習

毎回ではないが、事前にレジュメを作成してくる。プレゼン後にレポート提出のための修正を行う。

評価方法

平常点45%・レポート（定期試験）55%程度で評価する。

なお、既定の出席回数に満たない場合には、原則として単位を認定しない

テキスト

ゼミ生が選ぶテーマによっては使用するかもしれないが、特に使用しない予定。

授業概要

1980年代以降に進行した貧富の格差問題を考える。また格差問題を考えるのに必要な経済学の基本的な理論を学ぶ

授業計画

第1回	演習のスケジュールについての説明
第2回	ピケティ理論の概要
第3回	格差の指標
第4回	格差に関するデータ
第5回	格差の理論
第6回	資本主義の特徴
第7回	資本主義と格差
第8回	日本の格差
第9回	アベノミクスの特徴
第10回	貨幣数量説の形成
第11回	量的緩和政策
第12回	貨幣の謎
第13回	日本経済の変化
第14回	日本経済の今後
第15回	日本経済への提言
第16回	レポートの提出

到達目標

格差問題の現状を理解する。必要な基礎理論を理解する。

履修上の注意

自分の意見を積極的に発言すること。

予習復習

予習を重視し、自分の意見をまとめておくこと。

評価方法

レポートの報告と授業中の発言を重視する。

テキスト

授業中に指示する。

授業概要

日本経済が現在の低迷から脱却するためには、さまざまな経済政策や企業の経営努力が求められるが、その一つは消費者のニーズを発見することである。現在の消費者が何を求めているのか、どのような製品やサービスを求めているのかを知り、市場に送り出すための努力が必要である。

したがって本講義では、まず総務省「家計調査」により、過去 20 年間の製品・サービス別の消費の年齢別・地域別増減実態を知る。次いで、現在の消費者ニーズを知るためのさまざまな理論をとりあげ、その妥当性や問題点を解明する。具体的には、若者の消費ニーズを説明することで注目されている「さとり世代論」をはじめとして、「欲求の五段階論」「コト消費の理論」などをとりあげる。

授業計画

第 1 回	はじめに
第 2 回	「家計調査」による消費実態の概観
第 3 回	「家計調査」による製品・サービス別消費実態の解明 (概要)
第 4 回	「家計調査」による製品・サービス別消費実態の解明 (年齢別)
第 5 回	「家計調査」による製品・サービス別消費実態の解明 (地域別)
第 6 回	消費ニーズの諸理論の概要
第 7 回	欲求の五段階説(1) (概要)
第 8 回	欲求の五段階説(2) (事例)
第 9 回	欲求の五段階説(3) (意義と限界)
第10回	さとり世代の理論(1) (概要)
第11回	さとり世代の理論(2) (事例)
第12回	さとり世代の理論(3) (意義と限界)
第13回	コト消費の理論(1) (概要)
第14回	コト消費の理論(2) (事例)
第15回	コト消費の理論(3) (意義と限界)
第16回	まとめ

到達目標

第一に、「家計調査」のような統計データを見るためのノウハウを身につけることである。さまざまな統計データを入手し、読み解くことは、経済学の学習にとって必須である。しかし、必要なデータがどこにあるのかを知り、それをどのように加工することによって分かりやすくなるのかを、講義を通じて習得することを目指す。

第二に、現在の消費者がどのような製品やサービスを求めているかを知ることである。そのためには、受講生が各自で情報感度を高めることが不可欠であり、そのためのノウハウを本講義を通じて獲得することを目指す。

履修上の注意

高校生まではなじみが無かったと思われる経済記事になじみ、常に目を通す習慣を見につるよう努めて欲しい。

予習・復習

講義で取り上げることが出来るのは、必要な情報のごく一部でしかない。取り上げることが出来なかった貴重な記事や情報については、講義中に指摘するので、各自で読むことが不可欠である。

評価方法

講義での発表や議論に対する取り組みの積極性により評価する。

テキスト

「日本経済新聞」の記事、日経BPに収録されている「日経ビジネス」などの記事をはじめとして、さまざまな研究機関が公開している記事・研究論文などをネットからダウンロードし、これを共有し教材として議論する。

授業概要

本演習の目的は、教養演習Ⅰと同様に、一年生の基礎学力の向上と大学生としての知識、教養を深めることにある。経営学の基本テキストを輪読しながら議論することが演習の中心内容になるが、個人が共通課題の一部を分担し、プレゼンテーションを行う形式を取り入れる。発表を通して、文献の調べ方、報告内容のまとめ方、レジュメの作り方、発表時の言葉遣いなどをマスターし、2年時以降に必要なスキルを体得する。

授業計画

第1回	オリエンテーション（授業内容、授業方法、評価方法などの説明）
第2回	テキストの輪読と議論①：とにかく卒業
第3回	テキストの輪読と議論②：何とか就職
第4回	テキストの輪読と議論③：一括採用、入社式、新人研修
第5回	テキストの輪読と議論④：やっと会社
第6回	テキストの輪読と議論⑤：給料
第7回	テキストの輪読と議論⑥：労働組合
第8回	テキストの輪読と議論⑦：はれて家族
第9回	テキストの輪読と議論⑧：企業戦士
第10回	テキストの輪読と議論⑨：じっくり出世
第11回	テキストの輪読と議論⑩：会社人間の意識
第12回	プレゼンテーション①
第13回	プレゼンテーション②
第14回	プレゼンテーション③
第15回	秋期の総括
第16回	期末試験

到達目標

- ①基礎学力がレベルアップする
- ②テキストの内容を理解し、要点を整理し、発表できるようになる。
- ③経営学の基礎知識を身につける。

履修上の注意

無断欠席・遅刻、授業中のスマホいじり、私語、居眠りなどの行為に厳しく対応する。

予習・復習

与えられた課題の発表についてしっかり準備することを求める。

評価方法

授業態度、積極性、発表内容、期末試験を総合して評価する。

テキスト

三戸公『会社ってなんだ』を使う。プリントを配布するので、購入は不要。

授業概要

経済や経営の現場では、様々な問題に直面する。経済学や経営学は、そうした問題に対処するためにどうしたら良いかについて、多くの知識を蓄えるための学問である。多くの問題は、過去に発生した同種の問題にどのように対処してきたかについて学べば、解決する。その時に必要なのが、データ処理である。過去の状況と現在のそれとは大きく異なる。過去にあって成功した事例も、現在に置き換えればうまく機能しないこともある。それは何故か、そして、ならばどのようにすれば良いか、については、データを集めて情報処理をする必要がある。本演習では、その導入の部分について、考察したい。

授業計画

第1回	はじめに（データ処理の有効性と有用性）
第2回	パソコンはどのようにして動いているのか
第3回	基本ソフト（OS）とアプリケーションソフト
第4回	表計算ソフトとは何か
第5回	Excel できること、できないこと
第6回	まずは、表を作成しよう
第7回	続いて、グラフを作成しよう
第8回	どのデータにはどのグラフが効果的か
第9回	相対番地と絶対番地
第10回	コピーを有効に使おう
第11回	金利計算が簡単にできる方法
第12回	単利と複利
第13回	返済金を決定するのは、金利と返済期間
第14回	国債の利回りの計算方法
第15回	70の法則
第16回	試験

到達目標

本演習では、Excel を用いた情報処理ができるかどうか、が重要なテーマである。データを示されて、何を計算しどのように計算するか、が的確に理解できれば目標達成である。

履修上の注意

演習を進めるにあたって、次の演習内容はその前の演習内容を理解していることを前提に進めることになる。欠席はしないようにすること。やむを得ず欠席する場合は、前の演習の内容を理解しておくこと。

予習・復習

つねにパソコンの Excel に触れておくことをお勧めする。演習で用いたもの以外のデータを処理してみることである。

評価方法

試験で、データを示し、的確にデータ処理できるかどうかを確認する。

テキスト

今のところは考えていないが、ブルーバックスあたりの新書を教科書に指定することも考えている。

授業概要

大学で学ぶため社会で活躍するために必須である論理的思考を身につけることが本演習の目的である。情報があふれかえる今の時代において、情報を取捨選択し、正しい情報を収集加工する能力は重要であり、それらをもって、正しい根拠に基づき主張し判断することが求められている。

論理的思考を学ぶことにより将来、企画作成、戦略構築、ビジネスモデルの変革、等々を行うための基本スキルを身につけるための指導をし、さらにしっかりと文献を読み、議論することにより、コミュニケーション能力を実践的に高めるための指導をする。

授業計画

第1回	概要—論理的思考の重要性
第2回	イメージと思い込みの問題点
第3回	先入観と固定概念の問題点
第4回	メディア情報の問題点
第5回	二分論の問題点
第6回	正しい根拠の探し方
第7回	常識を疑う
第8回	役立つ情報の見極め方
第9回	簡単な数字の読み解き方
第10回	帰納法
第11回	演繹法
第12回	相関関係
第13回	因果関係
第14回	正しい結論の導き方①
第15回	正しい結論の導き方②
第16回	総括

到達目標

論理的思考の基本的な手法を理解し活用できるようになる。
実践的コミュニケーション能力を身につける。

履修上の注意

遅刻・欠席には厳しく対応する。積極的に発言できる学生の履修が望ましい。
文献の熟読、発表、議論を徹底して行う。

予習・復習

毎回課題・宿題を提出

評価方法

出席・課題・積極性、等々によって総合的に評価する。

テキスト

授業内で紹介する。

授業概要

本演習では、簿記の初級から中級レベルの学習を指導します。対象者は主に春期「教養演習Ⅰ」を受講した学生です。春期に続いて、日商簿記3級水準の勉強を行います。夏季休暇中に猛勉強をし、すでに日商3級の基本問題は、解答可能の状況になっていることが前提です。試験勉強のコツは春期と同様ですが、今期は「合格」という結果をいかに出すかに焦点を当てて学習していきます。第150回日商簿記検定日は11月18日（日）です。9月に開講するエクステンションセンターの「日商簿記3級講座」を並行受講してもらいます。授業の前半は検定試験に向けた総合問題を中心に答案練習を行います。試験の結果で、3級合格者は工業簿記を開始し、不合格者は翌年の2月に向け再挑戦の準備に入ります。よって本講座は、次年度の「基礎演習」＝日商簿記2級合格にもつながる内容になっています。1年次に日商簿記3級合格、2年次に簿記2級合格を希望する学生は受講をお勧めします。

授業計画

第1回	ガイダンス、仕訳の小テストを実施し成績順座席指定をします。	
第2回	論点学習① 商品有高帳、小口現金出納帳、伝票会計	
第3回	論点学習② 合計残高試算表の作成	
第4回	論点学習③ 精算表の作成	
第5回	実践問題① 仕訳・合計残高試算表	
第6回	実践問題② 仕訳・精算表	
第7回	実践問題③ 合計残高試算表・精算表の作成	
第8回	中間試験：日商簿記3級レベルの実践問題を出題予定	
第9回	日商簿記検定3級試験の問題解説と今後の勉強目標の再構築をします。	
第10回	3級合格者：日商簿記2級工業簿記開始。	3級再挑戦者＝2月受験の準備開始
第11回	工業簿記の勘定連絡図の把握	過去問題集①仕訳・精算表
第12回	費目別計算（材料費、労務費、経費）	過去問題集②仕訳・合計残高試算表
第13回	個別原価計算	過去問題集③仕訳・精算表
第14回	総合原価計算	過去問題集④仕訳・合計残高試算表
第15回	標準原価計算	過去問題集⑤仕訳・精算表
第16回	定期試験	

到達目標

日商簿記検定3級合格水準に到達すること。

履修上の注意

- ・エクステンションセンターの「日商簿記検定3級講座」を受講する。
- ・秋期「中級簿記」を履修してください。

予習・復習

- ・日商簿記検定3級試験の過去問題集を3回解答してください。

評価方法

- ・授業への参加意欲と中間試験、定期試験で総合評価をします。
- ・授業態度不良者は「不可」とする。

テキスト

開講日に公表します。

授業概要

みなさんは「社長」の仕事がどんなことか知っているだろうか。社長の考え方が分かると就職活動をする際に非常に有効となる。何故なら皆さんがどんなにこの企業に就職したいと考えても、皆さんの採用を最終的に決定するのは社長だからである。柴田ゼミでは社長の考え方を理解するため、みなさんにマーケティングの考え方をを使って事業計画書を作成してもらう。この演習により、これから本学で学ぶ企業やビジネス、マーケティングの初歩的な考え方を身につけてほしい。

授業計画

第1回	オリエンテーション（授業の進め方）・自己紹介
第2回	アニメ・ツーリズムを活用した地域活性化マーケティング
第3回	会社とは？ 社長とは？ 起業について考えてみるー学生起業家を例に
第4回	自分のやりたいことを考えてみる（拡散と収縮）
第5回	まとめ（小活①）
第6回	顧客を決める（顧客ニーズと課題の分析）
第7回	環境を分析する（SWOT分析）
第8回	ライバルについて考える（競合分析）
第9回	製品、価格、売り方、宣伝方法について考える（4P）
第10回	まとめ（小活②）
第11回	お金について考えてみるー売上、経費、利益
第12回	接客がなぜ重要か考えてみる（顧客満足）
第13回	事業計画を作成する
第14回	事業計画を発表する（プレゼンテーション）
第15回	まとめ（総括）
第16回	課題レポート提出の提出

到達目標

社長の考え方を意識し、それを踏まえた上で、自分のやりたいことをマーケティングの考え方に基づいて事業計画書にまとめることを目標とする。

履修上の注意

講義中の私語、携帯電話や音楽機器等の使用、食事は禁止する。講義の性質上、欠席があると事業計画書を作成できないため、公共交通機関の遅れ以外の遅刻については原則認めない。守れない者には厳しく対処する。また無断欠席は認めない。

なお、川口 Fes.への協力や企業訪問、ビジネスコンテストの見学など学外授業に参加してもらうことがある。

予習・復習

レジュメは各自インターネットからダウンロードして準備してもらう。利用方法は講義で説明する。毎回の講義の中で事前に課題（レポート等）を指示する場合がある。

評価方法

授業態度（50%）、提出課題の内容等（50%）により、総合的に判断し評価する。

テキスト

テキストや参考文献は必要に応じて演習中に指示する。

授業概要

本演習では日本の経営をより深く理解するための準備として、戦後史を中心とした日本経済の変遷と特質を修得する。日本経済は日本的経営の環境要因の一つであると同時に、日本の企業経営が日本経済を支えているという点において、経済と経営の関係は相互に不可分といえる。

経営学は生きた学問として身につけられなければならないが、歴史的視点を加えることも併せて重要である。日本的経営の環境要因としての日本経済は、過去から積み重ねられた歴史的産物であり、時代の一区切りとして、戦後日本経済の移り行きを経営環境の変遷という視角から考察することは、経営学を歴史的かつマクロ面から理解する上で有益と考えられる。

学んだ知識をもとに日本経済新聞や経営関連誌を自主的に読み進めることは必須であり、講師は強くこれを奨励する。

授業計画

第1回	ガイダンス ー経済と経営ー
第2回	日本経済の発展(1) ー占領期から復興期ー
第3回	日本経済の発展(2) ー高度成長期ー
第4回	日本経済の発展(3) ー国際化と経済摩擦ー
第5回	日本経済の停滞(1) ーバブル崩壊ー
第6回	日本経済の停滞(2) ー構造改革の試みー
第7回	日本経済の構造問題(1) ー日本的経済システムー
第8回	日本経済の構造問題(2) ー少子高齢化と労働市場ー
第9回	日本経済の構造問題(3) ー社会保障と税ー
第10回	日本経済の改革(1) ーTPPと農業改革ー
第11回	日本経済の改革(2) ーアベノミクスと成長戦略ー
第12回	経営環境としての日本経済(1) ー戦後日本経済史と日本的経営ー
第13回	経営環境としての日本経済(2) ー日本の産業構造と経営戦略ー
第14回	経営環境としての日本経済(3) ー日本の労働市場と日本的労務管理ー
第15回	日本経済と日本的経営 ー演習のまとめー
第16回	期末試験

到達目標

本演習の到達目標は、履修者が戦後日本経済の変遷と特質を経営学的な視点から修得することである。本演習を通して経済と経営の不可分な関係を認識するとともに、歴史的観点から経済および経営事象を捉えることに習熟できれば、将来、受講生が企業を中心とする組織に属した際に直面するであろう様々な環境変化の本質をより的確に判断する能力が得られると考える。

履修上の注意及び予習・復習

講義後、テーマをもとにテキストの担当箇所について議論するにあたり、それをリードする役割を順次履修者に求める。履修者は積極的に演習に参加することが求められるので、議論のリーダーでない場合も事前にテキストの該当箇所を読んで参加することが必要となる。

遅刻はやむを得ない理由がある場合には配慮する。

評価方法

担当するテーマに関する発表内容、準備状況、議論への参画度等、演習に対する取り組み度合いを70%、期末試験を30%の割合で評価する。期末試験は学期中に取り上げたテーマに関して記述式で解答を求める。出題の意図を理解し、演習で学んだ内容を踏まえて論理的に解答しているかどうか重点を置いて評価する。

テキスト

八代尚宏著『日本経済論・入門』新版(有斐閣、2017年)。